

アフ・トンガリキ遺跡の調査

南太平洋の孤島ラバヌイ（イースター島）は、チリ共和国の首都サンチャゴより西方3790kmにある。その海岸のほとんどの約1000体の石像（モアイ）が、祭壇（アフ）から落下し倒された状態で残っている。アフ・トンガリキ遺跡は島の東南部（南緯27度7分、西経109度16分）に位置し、1960年のチリの大地震に伴う津波によって二度目の破壊にあい全壊した。それ以来、研究者はもちろん島民にとっても、この遺跡の発掘調査と再建は悲願となっていた。1992年に日本企業の援助があり、チリ大学を中心とするアフ・トンガリキ再建委員会（代表O・ビノチエト国立南極研究所長、後にマルタ国立古文書館・博物館長）による発掘調査と研究、遺構の整備計画が企画され、日本のモアイ修復委員会（鈴木嘉吉委員長）が、これを支援することとなり、当研究所員も参加した。両国のはかイタリア・アメリカ・ポーランドの研究者の参加もあった。

遺跡は約250m四方に及ぶ広大な範囲で、海岸側にアフが立ち、内陸側に家屋、炉、洞窟と岩盤に彫られた魚、マケマケ（創造神の顔）の岩絵がある。この遺跡は1955年、ノルウェーの研究者、T.ヘイエルダールが島を訪れた時、最初に錨を降ろした海岸であり、そこは別世界のようにだったと言う。この頃すでに、トンガリキのアフ上には15体のモアイが、内陸部に向かって顔を下に倒れて数世紀が過ぎていた。津波によって一面が石とモアイの散乱場と化した。

今回の調査と整備は、アフと玉石敷広場を中心に行った。まず、予備調査として、現状の写真測量、地質調査、および、津波以前のデータ、写真の収集から着手した。1992年9月から始めた発掘調査では、まずアフの裏面基壇にそって6本のトレンチをいれ、乱石積基壇の基石と、それに接する墳墓を検出した。次にアフに直交する4本のトレンチを入れ、アフの構築、その前面の亀腹状の盛土（ランプ）及び、側面石（パエンガ）と敷石の技術的究明を行った。

遺跡は大きく2時期に分かれる。前期のアフは、後期のアフ（15世紀頃）と重複して、その痕跡を僅かにとどめているにすぎないが、正面（内陸部）を東にし、2基以上のアフが、南北に直線状にならんでいた。南のアフは横幅約30m、奥行5.7mである。正面には石敷が広がり、アフから7.2m離れた所に高さ0.9m、幅1.2m、厚さ0.15mの板石が並ぶ。アフと板石の間の空間がランプである。北のアフは、南のアフより約5mの間隔をあげ、横幅60m、奥行5.7mを測るが、ランプの板石の痕跡は残っていない。2基のアフは併存したのであるが、北のアフ前面に前期の小形モアイがあり、これに対応する白珊瑚製の目と黒曜石製の瞳が出土している。

後期の遺構は、前期の南北のアフが結合し、横幅98m、奥行6m、高さ5mの規模になっている。前期の小形モアイの石材がアフの石組に転用されたものもあった。ここでは前方の傾斜面がさらに4m拡がり、縁に高さ0.9m、幅1.2m、厚さ0.15m、の板石を立てている。つまり、全体で奥行が11mを越える大きなランプとなっている。この傾斜面には径約0.5mの玉石を敷き詰め、石敷広場から望むアフの壮大さを強調する効果があった。アフ上の15体のモアイは、全て顔を下に倒されていた。倒されたモアイの下、ヤブカオ（帽子）、ランプの中、さらに石敷

広場などを利用して、墳墓が作られていた。石室の一般的な規模は長さ2m、幅0.7m、高さ0.7m程であるが、なかには長さ4mの大きな竪穴式石室に9体の洗骨が埋葬されたものもある。モアイが立っていた時、アフ内にも墳墓があったのであろうが、津波によるアフ壊滅によってその痕跡はない。人骨の出土数は150体分を越えているが、その下限は19世紀まで降る。出土遺物は、モアイ、マケマケ、ウナギの頭部石造品、石器、骨品、貝製品がある。

発掘の成果と古い写真をもとにアフを再建した。また、周囲の遺構の復原を行った。その後モアイを建立した。ラパヌイは南極から強い風が吹き続ける。凝灰岩製のモアイは風化が激しく、それを防止するため、石材サンプルによるテストを繰り返し、樹脂による保存処理をおこなった。



発掘調査前の散乱するモアイ

(鈴木嘉吉・猪熊兼勝・伊東太作・沢田正昭・肥塚隆保・内田昭人・花谷浩・森本晋)